

## 罪の赦しと病の癒し

——マルコ伝第2章1～22節——

小池辰雄

1977年11月6日

屋根を穿ちて エホバはなんじの不義をゆるす 相手に対する全的信頼 心は得て得べからず  
われこそ我みずから故により いわゆる民主主義というもの 罪の赦し 病の癒し キリスト  
トに赦され 何故と理由づけることなしに 我は罪びとを招かん 心の癌というやつ 救し  
と癒し 断食 新しき福音は新しき在り方をもつて せざるを得ない 平伏しと赦し

## 【マルコ2:1～22】

<sup>1</sup>数日の後、またカペナウムに入り給いしに、その家に在すことを聞きて、  
<sup>2</sup>多くの人あつまり來り、門口すら隙間なき程なり。イエス彼らに御言を語  
り給う。<sup>3</sup>ここに四人に担われたる中風の者を人々つれ来る。<sup>4</sup>群衆によりて  
御許にゆくこと能わざれば、在す所の屋根を穿ちあけて、中風の者を床のま  
まつり下せり。<sup>5</sup>イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言いたもう『子よ、  
汝の罪ゆるされたり』<sup>6</sup>ある学者たち其處に坐ししたるが、心の中に、<sup>7</sup>『こ  
の人なんぞ斯く言うか、これは神を瀆すなり、神ひとりの外は誰か罪を赦す  
ことを得べき』と論ぜしかば、<sup>8</sup>イエス直ちに彼等がかく論ずるを心に悟り  
て言い給う『なにゆえ斯ることを心に論ずるか、<sup>9</sup>中風の者に「なんじの罪  
ゆるされたり』と言うと「起きよ、床をとりて歩め」と言うと、いづれか易き。  
<sup>10</sup>人の子の地にて罪を赦す權威ある事を汝らに知らせん為に——中風の者  
に言い給う——<sup>11</sup>『なんじに告ぐ、起きよ、床をとりて家に帰れ』<sup>12</sup>彼おきて  
直ちに床をとりあげ、人々の眼前<sup>まのあたり</sup>いで往けば、皆おどろき、かつ神を崇めて  
言う『われら斯の如きことは断えて見ざりき』

<sup>13</sup>イエスまた海辺に出でゆき給いしに、群衆みもとに來りたれば、之を教  
え給えり。<sup>14</sup>斯<sup>かく</sup>て過ぎ往くとき、アルバヨの子レビの、取税所に坐し侍るを  
見て『われに従え』と言ひ給えば、立ちて従えり。<sup>15</sup>而して其の家にて食事  
の席につき居給うとき、多くの取税人・罪びとら、イエス及び弟子たちと共に  
に席に列る、これらの者おおく居て、イエスに従えるなり。<sup>16</sup>パリサイ人の  
学者ら、イエスの罪びと・取税人とともに食し給うを見て、その弟子たちに  
言う『なにゆえ取税人・罪びととともに食するか』<sup>17</sup>イエス聞きて言い給う『健



やかなる者は、医者を要せず、ただ病ある者、これを要す。我は正しき者を招かんとあらで、罪びとを招かんとてきた来れり』

<sup>18</sup>ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食したり。人々イエスに来りて言う『なにゆえヨハネの弟子とパリサイ人の弟子とは断食して、汝の弟子は断食せぬか』<sup>19</sup>イエス言い給う『新郎の友だち、新郎と偕におるうちは断食しえべきか、新郎と偕におる間は、断食するを得ず。<sup>20</sup>然れど新郎をとらるる日きたらん。その日には断食せん。<sup>21</sup>誰も新しき布の裂きずを旧き衣に縫いつくることは為せじ。もし然せば、その補いたる新しきものは、旧き物をやぶり、<sup>22</sup>破綻ほこうびさらに甚はなはだしからん。誰も新しき葡萄酒を、ふるき皮袋に入ることは為せじ。もし然せば、葡萄酒は袋をはりさきて、葡萄酒も袋も廢すたらん。新しき葡萄酒は、新しき皮袋に入るなり』

### ●屋根を穿ちて

<sup>1</sup>数日の後、またカペナウムに入り給いしに、

ガリラヤ湖の一番北の方の湖沿いの所にカペナウムがある。今でも、キリストが伝道されたシナゴーグの遺跡があります。非常に貴重なものです。これは舟に乗つて行かれたんですが、

その家に在いますことを聞きて、<sup>2</sup>多くの人あつまり来り、

キリストが異常な人物であることがもう大分知れわたつているものですから。

門口すら隙間すきまなき程なり。

中に入れないと云ふ

イエス彼らに御言を語り給う。

伝道しておられた。これは会堂ではないようですが。

<sup>3</sup>ここに四人に担われたる中風ちゆうぶの者を人々つれ来る。

担架でもつて、四隅から担われて來た。

<sup>4</sup>群衆によりて御許にゆくこと能わざれば、

キリストの話を超満員で聞いているわけですから、入れない。

在います所の屋根を穿うがちあけて、中風の者を床のままつり下おろせり。

そういう絵を誰か描いたか知りませんが、まだ見たことない。これは名画になると思いますがね。大変なことです、これは。「屋根を穿ちて」ですから、人の家の屋根を破つてしまつて、そして吊り下ろした。向こうでは大体、家の回りは石造りです。木はあまりない。

「在す所の屋根を穿ちて、中風の者を床のままつり下した」

と。大体、屋根といいましても、日本みたいにいわゆる屋根形でなくて、平べつたいわけなんです。ですから、横から登つていって、上から真ん中をあけたらしい。



「彼らの」というんですから、そこに中風を連れて来た人たちの、  
「何がなんでもこれをキリストに」  
というわけですね。

中風の者に言いたもう『子よ、汝の罪ゆるされたり』  
これは驚いたですね。病の癒しですから、何か祈つて病の癒しをなさるかと思ったら、そ  
うではなくて、

「子よ、汝の罪ゆるされたり」

と。

### ●エホバはなんじの不義をゆるす

詩篇の103篇3節に、

「<sup>3</sup>エホバはなんじがすべての不義をゆるし、汝のすべての疾をいやし、<sup>4</sup>な  
んじの生命をほろびより贖いだし、仁慈と憐憫とを汝にこうぶらせ、<sup>5</sup>な  
んじの口を嘉物よきものにてあかしめたもう。斯かくてなんじは壯わかやぎて鷺わしのごとく新あらたにな  
るなり。」（詩篇103・3～5）

とある。この103篇の3節というのは非常に著しいところです。

「エホバ」というのは、「ヤーヴェー」という存在者、実存者、実在者。それを「わが主」  
と読んでいた。向こうの經典を読むときに、

「ヤーヴェー」

という字がくると、神の名をいきなり呼ぶのは畏れおおいということで、

「わが主」「アドナイ」

という読み方をやつていた。「アドナイ」の母音と「ヤーヴェー」の子音を一緒にすると、

「エホバ」

という読み方なる。だから、「わが主」という氣持と「実在者」という両方の氣持が入つて  
いるのが、むしろこの「エホバ」という読み損ないの、怪我の功名みたいなものです。そ  
れで、私はまた元に戻つて、「エホバ」という読み方の方が、昔からなんじんでもいるし、両  
方の

「わが主にして実存者、実在者である」

というのが「エホバ」という読み方の中に含まれているから——今の学者はみんな「ヤー  
ヴェー」と言つてますけれども——私は「エホバ」と元にもどしたいと思って、やつてい  
るわけです。

「エホバ」が、主にして実在者なる神が、一切の罪をゆるし病をいやす。罪を赦し病を癒  
すというような神さまの絶対権、絶対恩寵。それを地上でもつてできるひとが現れた。こ



れがナザレのイエスです。

「子よ、汝の罪ゆるされたり」

なんて、普通の人には言えないことなんです。しかも、この中風の者の今までのことなんか何も聞かないで、いきなりこういうことを言えるというのは、イエスというひとは、ちゃんとその人物の見通しがきくひとです。過去にどういうことをしたか、今どうであるかなんていうことが見えてします。サマリヤの女の素性が見えてしまつたでしょ（ヨハネ伝4章）。これもそういうわけです。

●相手に対する全的信頼

ところが、みんなの求めが非常に強いので、

「イエス彼らの信仰を見て」

と。「信仰」とは何もむずかしいものではない。

「自分の信仰が強いの弱いの」

と、そんなことを心配することはいらない。それは信仰を私しているからです。これは信じ仰いでいる。仰いでいるというのは、仰ぐ実在者があるから信じ仰いでいるのであって、自分の側を信じているんじゃないですよ、信仰というのは。自分の信念でも何でもない。相手を信じているんです。相手を信じ、仰ぎ奉っているんです、「信仰」という言葉は。「仰」の字はなくともいいけれども、「信ずる」という字だけで。

だから、イエスが自分を100%にその時に求めて、信じられていくだけです。自分の状態がどうであるかであるなんて問題ではない、こっち側の状態は。とにかく、これ（相手）が100%。これが信仰ということです。それには働きかかってくる。

ところが、自分を何かと思つて、そして、何のかんのと、全的でない、100%的でない、相手に対する全的信頼でないものは、信仰と言えないんです。

祈つていて、

「こうなるでありますようか？」

なんていう気持で祈つていたつて、それはダメです。また、

「現象がこうなる」

ということを、現象を求めていてもダメ。申し上げているとおり、根源の現実、一番根つこの現実です。時間的にいうならば、それは終末的現実といいます。質的にいうと、空間的にいうと、根源現実です。時間的にいうと終末的現実。というのは歴史の終り、神の新天新地です。終末的現実、根源現実に対する信。即ち、現在において永遠をつかむような在り方。相対的な次元において絶対的なものをつかむ在り方。

この部屋は限られた空間だ。けれども、みんな窒息しないでしょ。それは無限の空間とつながっているから窒息しない。有限の中に無限を宿している。人間の魂はみな、そういう



た無限を宿さないではいられないように出来ている。他のどんなもので満足しても、本當は満足できない。満足したような顔しているけれども、絶対的なものを要するということは、誰でもが宗教の世界を要するということ。だから、私は、

「万人は宗教人である」

とはつきり言うんです。それを拒む人は拒んでいいよ。どうせ、それでお終いだから。氣の毒になつてしまふね、本当に。そんなことで、どうして満足できているのかと。

「幸福、幸福」

なんて、移りゆくような幸福なんていうことでは。ヒルティーの『幸福論』というのは、そんな幸福を言つているのではない。私の『百世の師ヒルティー』（小池辰雄著作集第五卷1977年8月刊）は正直、若い人たちに読んでもらいたい。私ははつきり言うんだ、

「自分の本を買つてくれなんて言つているのではない。本当にこれを読んでください」

と。それを、

「よしつ、先生がそう言うなら」

と言つて、体当たりしてくる生徒、先生がいるかいないか。私は私心はないです。本当のものは何でも本当だと思うから。それが仏教であろうと、何教であろうと。

そういう根源現実です。キリストはそのような現実を持つてゐるひとなんです。永遠をつかんでゐるひと。永遠を生きてゐるひとです。神さまと同質なんです。同質なキリストである。似てゐるのではない。似姿ではない。

「人間を神の似姿に造つた」

と創世記に書いてある。あの「似姿」という訳も本当はあまり感心しない。人間は本来、神と同質に造られていた。まあ、ああいう神話的表現ですから、似姿なんていう言い方をしますけれども。その奥は、同質なんです。だから、

「<sup>ひと</sup>靈止」

という。神靈が止まつてゐるのを本来、<sup>ひと</sup>靈止という。

電車の中を見ても、町を歩いても、みんな希望のないような顔をしてゐるよ。

「ああ、あんな人なんか救われるといいなあ」

なんて思うよ、私は電車の中で。向こうが聞けば、いくらでも話してやるけれども、いきなり話しかけたら、びっくりしちゃうからね。だから、言わないけれども。本当だよ。福音を身につけているひとは、機会があつたら、機会があつたら——何でも強引に人を折伏するなんてことはよくないけれども——機会があつたら、いつでも語つてあげるという、皆さん、心備えをもつてゐますか。私のパンフレットなんかをカバンに入れておいてください。そういう人があつたら、

「どうぞ、お読みください」



と。誰にでもやるのではないよ。そういうようなことが本当の伝道というんです。

### ● 心は得て得べからず

そういうわけで、全幅の信頼をもつて、屋根をぶち破つても行つたという。

「求めよ、さらば与えられん」

という。それだけの求めをもつて、今の若い人たちが宗教の世界に、真理の世界にぶつかつているか。

『無門関』に書いてある。達磨さんのところに青年が道をたずねて來た。

12月の寒い夕方にやつて來た。面壁している達磨さんに道を尋ねたところが、達磨は振り向きもしない。仕方がないから立ちすくんで、振り向くまで待つていて。これは徹夜ですよ。だんだん雪が降ってきて膝まで没した。夜が明けそうになつたから、達磨が

「何だね」

と問うた。青年は

「私はこのようにして道を求めています」

と答えた。達磨は

「いやいや、まだだめだ」

なんて言つて、また壁に向いてしまつた。そうしたら、青年は自分の左の腕を切つて盆にのせて、

「私は棄身でござります」

と。さすがに、達磨も

「そうか。棄身で求めているか。それでは、私に心をもつてくれ」  
「お前は今、腕を持つてきただれども、心を持つてくれ」と。青年は

「心は得て得べからず」

「心を持つてきくれと仰るが、私は心臓をくり抜くわけにはいきません」と言つたら、達磨が

「われ汝のために安んず」

と言つた。「それで安心した」と。さすがは、禅問答ですね。持つてくることのできないもの、心は、対象化して把むわけにいかない。

「持つてくる」とのできないものが分かつたか。それで、私は安心したぞ」という意味なんです。それで、達磨は弟子にしてやつて、この青年は禅宗の第一祖になつた。

「慧可断臂」

という雪舟の絵がありますね。上野の博物館に行って見てください。それだけ、昔の人は棄身で道を求めた。教えではない。道を求める。だから、私は「道」という字が好きだ。

「大道無門、千差路在り。この閻を透得すれば乾坤独歩」



という。

「日本人は道の民だ」

と、私は何回言っているかわからない。茶道、弓道、書道、画道、柔道という。『芸術のたましい』（著作集第二巻1976年12月刊）に書きました。

そういう求めです。

「求めよ、さらば与えらんれん」

というのは、

「棄身で求めろ」

ということです。しかし、求めるものは何かと、神・キリスト、お釈迦さん、如来そのものを。それ以下のものを求めるなということ。

私は、くだらない宗派根性なんてないですから。まだ、主義だの概念の世界で、とやかく沙汰し議論しているうちはダメです。そんなものは問答無用です。

●われこそ我みずから故により

「子よ、汝の罪ゆるされたり」

とは、（べきねき）霊霧の如きものだね。ところがすぐ、そいつを批判するやつがいる。

<sup>6</sup>ある学者たち

旧約の律法やなんかに詳しいのを「学者」といいます。

其處に坐したるが、心の中に、<sup>7</sup>『この人なんぞ斯く言うか、これは神を瀆すなり、神ひとりの外は誰か罪を赦すことを得べき』と論ぜしかば、

これはユダヤ教でいえば、全くその通りなんです。だから、そういうように心のうちに思つた。そう思つてまた外にも言つたらしいね。

<sup>8</sup>イエス直ちに彼等がかく論ずるを心に悟りて言い給う

もう、彼らの心の動きは顔を見ていれば分かるんですよ、キリストには。言葉に出さなくとも。

「また、くだらない批評をしているな、ユダヤ教にこだわっているな。まあ、無理もないよ」

と言うわけだ、キリストから言えば。ユダヤ人というのは、律法やそういうことには厳格だからね。

『神ひとりの外に人の罪を赦すことはできない。旧約聖書の神様の他にいないんだ』と。

『なにゆえ斯ることを心に論ずるか、<sup>9</sup>中風の者に「なんじの罪ゆるされたり」と言うと「起きよ、床ゆかをとりて歩め」と言うと、いざれか易やすき。10人の子の地にて罪を赦す権威ある事を汝らに知らせん為に』



と。まあ、謎のような言葉です。まだ中風は治されていませんよ。

イザヤ書を引用しましょなぞうかね。旧約聖書では、何といつても、イザヤ書は最高最深のところです。43章25節。

「<sup>25</sup>われこそ我みずからとがの故によりてなんじの咎とがをけし汝のつみを心にとめざるなれ」

と。非常に著しい言葉です。

「私は私みずからの故に

お前のためではない。私みずからのために

汝の咎を消し、汝の罪を心にとめざるなれ」

と。およそ聖書の宗教は御利益宗教とは違う。原因も理由も目的も全部、神さまで。我々の救いも神のためにです。神のための救いで、我々のための救いではない。全く神中心です。

大体、

「私たちのために」

なんて言われて、あなた方はそれでいい気になれますか。こんな野郎のためになんて、そんな相対的なしょがないやつのためになんて。そうじやないよ。そんな相対的なしょがない破れ器のためにではない。

「神さまのために」

なんです。

### ● いわゆる民主主義というもの

「我思うゆえに我あり」

ではないですよ。デカルトはそんなことを言つたけれども。「我思うゆえに我あり」と、近代人はみんなそう思つてゐる。シュバイツァーが攻撃した、

「デカルトはこんな」とを言つて、空しい」

と。まあ、医科志望の学生は、シュバイツァーあたりは読まなくてはいかん。シュバイツァーの『わが生活と思想より』というのは素晴らしい本です。ああいうのを教科書に使いたいけれどもね。

どうも、この頃は次元が低くて困るよな。ただ会話のような語学をやつてゐるから。いんだよ、しゃべれなくたつて。いい加減なことをしゃべるよりも、本式なことを演説でするやつの方が本ものだ。まあ、こういう横紙破りみたいなことを私は時々言うものだから、誤解されて困るけれども。私の気魄が分かつてくれなくては困る。ドイツ語の教科書や英語の教科書を見ても、向こうの素晴らしい詩なんか載つかつていなかじやないか。だから、先生方に言うんだよ、

「いい詩をプリントにして教えてやつてください」



と。ところが、先生方がそういう興味をもたなかつたら——何も先生の悪口を言つているのではない——しようがないわけだ。英語だつたら、ロングフェローの

「サーム オブ ライフ」(A Psalm of Life 人生の歌)

なんていうのは、ぜひ読んでもらいたい詩です。

どういうんだろうね、この頃は。いわゆる民主主義という、平板な類型的な、特色のないような人間をつくつて何になるかと思う。それぞれの特色を本当に活かし鍛えあげ、そして大きなハーモニーとなる。交響楽がそうじやないですか。笛は笛、バイオリンはバイオリン、ピアノはピアノ、太鼓は太鼓、それぞれの音を然るべき時にちゃんと組み合わされて発するから、大交響楽になるじやないですか。みんな同じ笛だつたらどうなるか。

ベートーヴェンなんていう、ああいう頭は凄いね。ベートーヴェンは聞こえなくたつて、自分でもう靈の耳で聞いてしまつてはいるから、ああいうような作曲ができる。彼の偉大な作品は全部、自分の耳では聞こえなかつた。ミルトンは盲でもつて、あれだけの偉大な

『パラダイス・ロスト』『パラダイス・リゲンド』

を書きました。そういうことを思つても、もつと打ち込みが欲しいよね、今のは。

私自身もずいぶんボヤボヤしてましたから、仕方がない。これから、あと20年くらい頑張らなくては。

### ●罪の赦し

「神さまの他に赦すものはない。お前はけしからん。人間のくせに、『汝の罪ゆるされたり』なんて、とんでもない冒瀆罪だ」

という。

「中風の者に『なんじの罪ゆるされたり』と『<sup>やさ</sup>と、いざれか易しいか』

という。皆さん、どつちがやさしいんですか。これは、

「罪ゆるされたり」

と言つ方がやさしい。また、

「病癒されたり」

と言つ方がやさしい。どつちの答も出てくるんです、私に言わせると。註解書にはしかし、「罪ゆるされたり」の方がやさしいというように普通は書いてあるよ。どつちも易しいとも言えるし、今度は、

「いざれか易き」

なんてキリストは仰るけれども、どつちも難しい。また、どつちも易しい。答はいくつも出てくる。困つたもんだね。その答はなぜそれだけ出てくるかをお話します。

罪の赦しは、神と同質の神の子でなければ言えないことです。難しいと言えば、これほ



ど難しいことはない。神さまの子でなければ言えないんだから。ただ、今仰っているのはキリスト自身なんだ。キリストは神の子であるから、このことを言うのはやさしいんです。彼は罪なきひとですから。罪なきひとだけが罪を赦すことができる。イザヤ書53章4節に、

「<sup>4</sup>まことに彼はわれらの病患やまいをおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。<sup>5</sup>彼はわれらの愆とがのために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰ごらしめをうけてわれらに平安やすきをあたう。そのうたれし痍きずによりてわれらは癒されたり。<sup>6</sup>われらはみな羊のごとく迷いておののおの己おのが道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。」（イザヤ53・4～6）

と書いてある。凡てのものの不義、罪を彼——エホバの僕しもべ、キリスト——のうえに置きたもうた。キリストは不義のないひと。これは有名な「エホバの僕」の歌です。神の僕の歌。キリストは神の僕ですからね。神の子であり、神の僕である。「子」は、本質的に——質的なはなしです——神と同質であるから「子」という。「僕」というのは、神さまの意志を100%に行ずる人を「僕」という。100%に行じなければ、本当の僕ではない。パウロがキリストにひつくり返されて、

### 「我はキリストの僕」

と彼は言つたときに、全くキリストに従つた。彼はそれで素晴らしいことになつた。そのパウロが本当の自由をまた唱えた。御靈が来ているから。本当の僕は本当の自由なひとなんです。

## ● 病の癒し

<sup>10</sup>人の子の地にて罪を赦す權威ある事を汝らに知らせん為に——中風の者に言い給う——<sup>11</sup>『なんじに告ぐ、起きよ、床をとりて家に帰れ』

「お前の中風は治したぞ」

とは仰らない。寝ている者に、

「起きろ、床をとりて家に帰れ」

と。キリストは、ある時は手あしを取つたりする。ある時は、ただ言葉で言う。相手次第です。跛者あしなえを立たせてしまつたり、めくら盲めくらを治してしまつたり、癱病人を治してしまつたり。大変なひとです。キリストは神の靈言を持つていてから、

「わが言は靈なり生命なり」

という。だから、「ゆるされたり」と言うと、相手は本当に根源的にゆるされてしまう。けれども、これはまだ或る意味において約束の状態です。キリストは十字架にかかるまでは、本当の罪のゆるしはなさらない。未来完了を今、現在完了としてキリストは言われた。また、キリストの行為、これも靈的な行為で力を持つていて。



その「ゆるされたり」ということは、心の世界で受けとるんですね。これはある意味において、やさしい。ところが今度は、

「起きよ、床をとりて歩め」

となると、これは心の世界でなくて身体の現象にやつてくるわけです。中風が癒された。

なぜ、キリストがます

「なんじの罪ゆるされたり」

と仰つたか。心の世界を本当の現実にまずもつてきたわけです。「ゆるされたり」と。

「もう、ありがたいな」

と。中風が何か悪いことをしたとみえる。

「しようがないな」

と彼は思つていたにちがいない。それを100%に無条件にゆるされたとなつたから、これはもう心の世界に喜びが来ているわけです。

「病は気から」

と言う。病気という。気の世界がおかしくなつていてるから。気の世界には、それが罪であろうと、悲しみであろうと、苦しみであろうと、いろんな原因があるよ。

「どうも落第してしまつた。どうも失恋してしまつた。事業に失敗してしまつた。

悪いことをしてしまつた」

とか、気がおかしくなるにはいろんな原因がある。

「みなに誤解されてしまつた」

とか、何でもいいよ、気がおかしくなつて滅入つてしまつ。この「気」が病んでいる。この場合は、何か罪のことがあつたから、

「罪ゆるされたり」

とおつしやつた。

気がおかしくなつていてる病気が治つてしまつていてるんだ。言葉の本当の意味の病気が治つてしまつていてる。気が病んでいるのが治つてしまつたものだから、罪の世界がゆるされてしまつたものだから、今度は、

「起きよ、床をとりて歩め」

と。相手の中風の人がこういう状態でなければ、いきなりキリストはこれを仰るわけです。ところが、この状態を先ずははずさなくてはいかん。だから、この状態をはずさないで、いきなりこれをすることは難しいんです。ところが、キリストにとつては、先ず根源の世界の心の世界を言うことはやさしい。キリストが言われた、

「どつちが易しいか」

というのは、そういう気持で言われたと思われます。心の状態がよくなつてしまつていてるから、今度はこれを言う。中風のこの人の場合は、いきなり



## 「床をとりて歩め」

と言えないんです、キリストは。だから、一段構えになつてきたわけです。こつちの方があ  
難しいんです、相対的な意味では。

そして、身体に力が加わるためには、こちらが本当に受けとる気になつていなくては加  
わりませんよ。私もしばしば人の病を癒しましたけれども、それは受けとる側が疑つてい  
たら働かない。キリストですら、疑つている連中にはダメだと。それは人間は物理的法則  
ではないから。靈的法則だから、人間の世界は。物理法則ではないんだから。靈的法則と  
は心の世界だ。心がそつちに向いてないで分裂していただばダメ。

ただし、心が非常に悪いときでも、これを霊體へきたいの如くにひつくり返すことが出来ますよ、  
キリストは。パウロがキリストに反抗していたときに、ひつくり返されたでしょ。そういう  
力を持つています、もちろん。けれども、本当の意味における信仰がなかつたならば、  
受けとる気合がなかつたならば、これは現象的には生じてこない。

### ●キリストに赦されて

神の子は神の子だ。今度は、我々はキリストを受けとつてゐる者。キリストを受けとつ  
てゐる者は本当の意味では、聖靈が来ていなければ、御靈が来てないと、受けとつてゐる  
とはいえない。キリストの聖靈が来てないと。だから、

「聖靈のバプテスマを受けていなければ、本当のキリスト者ではありませんよ」

とパウロが言つてゐる通りです。人間は、私たちは罪びとだけれども、罪びとの中にキリ  
ストという、キリストの靈というものの凄いものが來てゐるというと、キリストは或るところ  
で言つてゐる、

「汝らも人の罪を赦すことができる」

ということを仰つてゐるのはその意味なんです。私たちは手放しで人の罪を赦すことはで  
きない。キリストに赦されてゐるから、人を赦すことができる。赦されてゐるから。そ  
でなかつたならば、

「赦したけれども、また癒しゃくにさわつた」

なんていうことになる。神さまとの祈りの世界で、人を怨うらんでいたら、その人の祈りはき  
かれません。十字架の贖罪で私たちはキリストに赦されてゐるから、赦すことができる。  
赦すことが、こつちが出来ても、相手がつつかつてくれば、しようがないよ相手は。そ  
れは相手の状態でもつて、相手はただ自分が地獄に落ちるだけのはなしだ。どこまでも物  
理法則ではないんだ。心的法則、心の法則の世界です。靈法の世界ですから。「自由」とか  
何とか言つたつて、みんなそうですよ。

だから、人の罪を本当に赦してあげることができるし、またこの御靈の力でもつて病を  
癒してあげることができる。やつてくださいよ、皆さん、本当に。



「私にはまだそんな力はありません」

なんて、いつまでそんなことを言つてゐるんだ。自分で力を私しようと思つたら、いつまでたつてもダメですよ。自分には力がない。キリストだつて仰つたではないですか。

「私は何もできない。神さまが私を通してしているんだ」

とキリストが仰つてゐるではないですか。いわんや、我々が自分でできるなんて思つたら大間違い。キリストが為し給う。

「自分はまだ修行が足りませんから。まだ私は愛が足りませんから」

なんて、何を言つてゐるか。キリストに本当にぶつぶつぶれてゐるんですよ、十字架でぶつぶつされてゐるんですよ、自我というものが。自我というものがぶつぶつぶつされてゐるから、もうそこに漲つてゐるところのキリストの愛が、力ある靈的な愛が働けば、必ず働きます。

「まあ、困つたな。これはやつぱり、小池先生に頼まなくては」  
なんて、いつまで「小池先生」なんて言つてゐるんですか。もう君たちは自分でやつてくださいよ。

### ●何故と理由づけることなしに いきなり

「起きよ、床をとりて家に帰れ」と仰つた。すると、

<sup>12</sup> **彼おきて直ちに床をとりあげ、人々の眼前<sup>まのあたり</sup>いで往けば、皆おどろき、かつ神を崇<sup>あが</sup>めて言う『われら斯<sup>かく</sup>の如きことは断<sup>たん</sup>えて見ざりき』**

見たことがないと。その通り。もの凄い劇的なシーンですね。

画家にこういうところをひとつ描いてもらいたいね。もう氣魄がくれば、形はどうでもいいんですよ。画家に限らず、誰でも描けるんだ。もう、氣魄がくれば問題ではない。どうだね、あの棟方志功なんていう、あの絵を見てごらんよ。あんなのは私でもちよつと描けそうな絵だ。小学校の人の絵みたいだ。そういうようのが、いわゆる外の形の整わざるところの、内側からもの凄く発動してゐるところの力。それがいわゆる人間の相対的な形を破つた形を作つていく。そこが芸術の世界の素晴らしさでしょ。文章でもそうですよ。演説でもそうですよ。本ものはみんな、いわゆる形式を破つていく。もう、キリストが全くそのような歩きかたをしてゐる。

<sup>13</sup> **イエスまた海辺に出でゆき給いしに、群衆みもとに來りたれば、之を教え給えり。**

この当時、録音でもあつてね、キリストの言葉をみんな録音しておいたら大変なことだ、これは。キリストの言葉の何分の一が伝わつてゐるか分からぬものな。だから、「聖書はかけらだ」



とマルチン・ルターが言つた。「聖書はかけらだ」という。これで神さまの言葉が全部伝わつてゐるなんて思つたら大間違いなんです。『聖書の人ルター』（著作集第七巻1984年2月刊）を今度は書きますけれども、聖書はかけらだと言う。ただし、「かけら」を見て、その全貌が見えるような見方をしなくてはいかん。象の尻尾を見て、あの象の全体の姿が見えたら、これは本当の見方だ。ところが、象の尻尾を見て、象は長いものだなんて言つたら、それはダメだよな。

<sup>14</sup>斯<sup>かく</sup>て過ぎ往<sup>とも</sup>くと、アルバヨの子レビの、

これはマタイのことです。取税人です。マタイ伝を書いた人です。

取税所に坐しておるを見て『われに従え』と言<sup>い</sup>給え<sup>ば</sup>、立ちて従えり。

「われに従え」と。今の青年だと、

「われに従え」

なんて言われると、

「何だ?」

なんて言つて反抗するのが多いよな。「はいつ」と言つて従つて來るのがいないんだ。

「何故と理由づける」となしに、ただ為して且<sup>な</sup>つ死せんのみ

“no reason why, but to do and die”

という。私はあの言葉が大好きなんだ。テニソンの詩です。クリミヤ戦争で、向かつて行つた六百の騎兵が全滅した。もうこれは死地に向かつて突撃すると同じことが分かつても、命令だから従つたああいう詩は、私は感激して中学時代に読んだものだがね。どういうもんどううね、全く今は。

### ● 我は罪びとを招かん

<sup>15</sup>而<sup>しか</sup>して其の家にて食事の席につき居給うとき、多くの取税人・罪びと、

「罪びと」というのは律法をよく知らないで、いい加減な生活をしている者を罪びとと言つた。罪びとではないですよ。

イエス及び弟子たちと共に席に列<sup>へいな</sup>る、

いわゆる宗教家、道徳家からつまはじきにされるような<sup>が</sup>連中だ。

これらの者おおく居て、イエスに従えるなり。

キリストの教えは<sup>けた</sup>桁<sup>がけ</sup>がちがうんです。キリストは、旧約聖書でもつてこだわつてゐるようなやつらのむつと上<sup>じ</sup>だからね。

<sup>16</sup>パリサイ人の学者ら、イエスの罪びと・取税人とともに食し給うを見て、

その弟子たちに言う『なにゆえ取税人・罪びとともに食するか』

けがらわしいじやないかと、こういうわけだ。

私は、池袋の——あそこらに紅灯の巷があるね——横丁を歩いていたら、袖引き女みた



いなのがいたわけだよな。そうすると、私と一緒に歩いていた無教会の或る先生が、

「汚らわしい」

と言つた。私は、さすがは無教会だと思つた。私はむしろ、そういう人たちに本当に福音を伝えたい氣持でいるのに、

「けがらわしい」

と言つた。冗談じやないよ。これはちょうど、

「なにゆえ取税人・罪びととともに食するか」

と言つた。パリサイ人と同じ根性になつてしまふ。無教会がパリサイだとは、私は言ひませんけれども、どうもそういう傾向が強い。かえつて、ああいう人たちの中には純真な魂のいることを或る検事の人が私に言つたです。

<sup>17</sup>イエス聞きて言い給う『健やかなる者は、医者を要せず、ただ病ある者、これを要す。我は正しき者を招かんとあらで、罪びとを招かんとて来れり』

健康者には、医者はいらない。病人にはこれが要る。

「健やかなる者は医者を要せず」

と言ひますけれども、さて、誰が本当に健やかか。自分は健やかだと思つてゐるのは実はあぶない。私なんかも健康だなんて言つてゐるとあぶないです。どこか少し欠陥のある人は大いに制限をして、節制して、かえつて長生きするけれども、いわゆる健康な人はコロツとまいつたりする。

私はもともと蒲柳の質だから、大体自分の体力が分かつてますけれどもね。「甲種合格」なんていう人はうつかりするとあぶない。私の亡くなつた兄なんかは甲種合格で立派な身体をもつていた。精神力も肉体も立派でしたが、それだから、腸チフスにかかるても、夏だから暑いくらいに思つていたらしい。

「健やかなる者は、医者を要しない。病んでいる者はこれを要す」

と。ところが、私たちは、魂の世界では誰でも病人なんだ。自分は健康者だなんて思つているけれど、魂の方では病める者なんです。なんとなれば、我々はみんな罪びとだから。万人これ罪びとなり。

「晴天白日、天地に恥じず」

なんていう言葉があるけれども、神さまの鏡に見せたらダメですよ、誰だつて。神さまの前に本当に100%に、神と同じ心になつていくことの出来たのは——如来と同じになつたのはお釈迦さん——神と同じになつたのはキリスト。それだけですよ。その他にいないんだ。

## ●心の癌というやつ

ところが、パリサイ人は、自分たちは健康な者だと思つてゐる、精神的に。自分を何かと思つてゐるのは、これが靈的傲慢というんです。この罪は逆に一番重い。キリスト



が敵にしたのはそういうご連中です。

「我こそは宗教的な人間である。我こそは道徳の人間である」

なんて思つているやつらがキリストの敵なんです。キリストは「我こそは」と言えるひとつだけれども、それを絶対に仰らない。自分を何ものともしない。だから、私はキリストのことを「無者」と言つたでしょ。自分を何ものともしない。私がない、無私者、私心のないひとです。

キリストはこう言われたけれども、

「お前たちこそ本当は病人だよ」

という言葉があとには含まれている。けれども、彼らはそれが分からぬ。

「私は取税人、遊女、癩病人や盲人や、しようがないと言つて自分を吐き棄てるような、そういう人たちを相手にしにやつて来たんだ。そういう人たちを通して

私は天国を築いてゆくんだよ」

というのがキリストの天国なんだ。

この世の人たちは、価値がひつくり返つてる。神さまぬきに

「我こそは」

なんて思つているのはサタンの子だ。サタンはそういうんだから。サタンというやつは神に敵して、「我こそは」と言うやつが、これがサタンだから。マルチン・ルターが「白きサタン」と言つた。黒いサタンと白いサタンと一つある。黒いサタンはすぐに分かるけれども、白いサタンは見かけ上、ばかに立派なんだ。ところがどつこいという。そういうのが一番悪い。

ところが、みんなこれは病者であり、みんなこれ罪びとです。

「すべての罪をゆるし、病をいやす」

という。心の世界と身体の世界。心の世界の罪の方がもつと身体の世界の病よりも重い。

癌はなかなか治らない。癌を本当に治すような術や薬が出来たら、これはノーベル賞金だろうね。ある程度は出来ているらしいけれども、だけれども、そういういかんよ、癌は。ところが、心の癌というやつは「罪」なんです。心の癌、心癌の方がなお悪い、体癌よりも。これが罪。自我というやつ、我執というやつです。みなこの我執をいかにしてやつつけることが出来たかというわけですね。この我執を宗教の世界で突破したのは、最澄、空海、法然、親鸞、日蓮、道元。これはみんなその問題でとつくんで突破した連中ですよ。「南無阿弥陀仏」になつたり、「南無妙法蓮華經」になつたり。私のは

「南無キリスト」

というんだ。



## ●赦しと癒し

これは心の癌が私たちは癒されたんだ。あなた方はキリストを受けとつたら。そうした  
ら今度は、

### 「床をとりて歩め」

という。身体の方の癌、身体の病をこつちから治されていく。根源現実では治る。人間は  
どうせ死にますよ。けれども、肉体は亡びていきますけれども、今度は靈体がその後に与  
えられてくる。靈的な体が。靈身靈体です。靈身靈体となつて神さまのもとに生かされる  
のが、これが本当の救いです。罪の赦し、病の癒しが完全にされていく。地上ではダメだ。  
天界においてそうなつていく。

信仰的現実は地上ではそうです。信仰的現実としては、罪は赦され、病は根源的には癒  
されているけれども、しかしながら、「永遠の生命」をこの肉体そのものは持つわけにはい  
かない。信仰的現実では両方とも癒されているけれども、今度はそれが生まの現実になる  
のは天界に於いてのはなしだ。キリストの甦りの生命というのはそのことです。

病気も根底においては既に癒されているということをはつきり受けとりながらいきなさ  
いよ。現象面がどうであろうと。健全な身体の質がもう来ているんです、靈体として。だから、  
いつ死んでも、絶対にそれで亡びてしまわないと。

## ●断食

さつきちょっとと言い忘れたけれども、ユダヤ教ではキリストを「神の子」としなかつたから、  
冒瀆者とした。ユダヤ人は今でもなおそう思つてはいる。だから、イエスを受けとらない。

### 「キリストは預言者の一人だ」

くらいにかしない。だから、新約聖書は読まない。新約聖書を受けとらない。そういうユ  
ダヤ教のごりごりのチャンピオンがパウロだつたんでしょ。パウロがそういうユダヤ教の  
チャンピオンだつた。だから、キリストを信ずる者を迫害してはいたでしようが。これがキ  
リストにひつくり返されて、本当にキリストの弟子になつた。そういう事態をなぜ今、ユ  
ダヤ人たちは受けとらないかと、私は不思議でしようがない。

### 「あれは、パウロは間違つた」

と、そう言つてはいるんだから。どういうんだろうね、ユダヤ人というのは。全く頑なだね。  
そういうユダヤ人と手放しで喜べるのかね。

<sup>18</sup>ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食したいたり。  
バブテスマのヨハネです。

人々イエスに來りて言う『なにゆえヨハネの弟子とパリサイ人の弟子とは断  
食して、汝の弟子は断食せぬか』  
汝の弟子は食べてるねと。



私は夏の集会を、小海線の清里の清泉寮でやつたときに、私の弟子の二、三人の人が断食してかかつた。

「小池先生は断食しない」

と言つて、私を審いた。その連中は出ていった。私は断食のための断食なんかしない。ある必要に迫られたときに断食をして集会をしたこともあります。けれども、「断食しなければ」と、そういう集会は——また或る人は断食して酒を飲んでいる人がある——これも間違い。キリストはそういうような意味において断食したり、なにか宗教的な勤行をすることをひとつも仰つていいない。

<sup>19</sup>イエス言い給う『新郎の友だち、新郎と偕にあるうちは断食し得べきか、新郎と偕にある間は、断食するを得ず。

「新郎」というのは、自分のことを「新郎」に例えて言われた。

「私が弟子たちと一緒にいるときに、私の弟子は断食できるか。新郎と偕にある間は断食する必要はないし、そうすることはできない。けれども、」

<sup>20</sup>然れど新郎をとらるる口きたらん。その日には断食せん。

「私は十字架にかかる。今私は向こうへ往つてしまふ。その日には断食せざるを得なくなるだろう。そして、祈らざるを得なくなるだろう」

と。断食はただ断食のためでない。本当に祈るためです。それは断食して祈れば、凄い世界に入りますよ。経験して知つているから、私は。キリストは、

「私は今、新郎で一緒にいる。けれども、私が見えなくなつたら、その時は、弟子たちは本当に祈らなくてはいかん。今度はそうしたら、何がやつて来るか。聖靈がやつて来る。十字架の贖罪をしてから、その後から聖靈が来るぞ」と言われる。

●新しき福音は新しき在り方をもつて

<sup>21</sup>誰も新しき布の裂きを旧き衣に縫いつくることは為し。もし然せば、その補いたる新しきものは、旧き物をやぶり、破綻きらに甚だしからん。

「新しき衣」は即ちキリスト、キリストの福音です。「旧き衣」は旧約の律法です。

「福音と律法は合わないんだ」

と、こういうわけです。福音は超律法の世界だから。

「旧約と新約は合わないんだぞ」というわけです、はつきり言えば。

「旧約はただ棄てるのではない。旧約の世界は全部、私が新約でもつて満たしてし

まつたんだ。だから、いらないんだ」と。ただ否定しているのではない。旧約の精神の一番深いところを実は、新約でもつて成



就してしまつてゐるから、これはもう要らない。モーセの十誡以上のものがキリストの山上の垂訓であるんです。

「汝、殺すなけれ」

「兄弟を憎む者は殺したのである」

と言つた。だから、キリストの律法の方が、福音はもつと深いんです。それでは、そういつたようなことがどうしてできるかとなると、この愛の世界です。福音の根底は愛です。

ヒルティーが

「愛は一切に勝つ」

と言つた。これは彼の墓碑名になつてゐます。愛は一切に勝つ。愛は一切を救い上げるということです。「愛は一切に勝つ」「天下無敵である」というのはどういうことかと、相手をみんな救い上げていく力をもつてゐるということ。敵を敵とも思わないということ。

「あの野郎！ 敵だ」

なんてやつてゐるから、相対的次元にいるから、いつまでたつても始まらない。もう一つ上の次元に入つてしまえば、樂でしようがない。私はどう思われたつて、いつこう痛くも痒くもない。

<sup>22</sup>誰も新しき葡萄酒を、ふるき皮袋に入ることは為じ。

新しき葡萄酒、福音を、旧き皮袋、旧約の中にいれるわけにいかないと。

もし然せば、葡萄酒は袋をはりききて、葡萄酒も袋も廢すたらん。新しき葡萄酒は、

新しき皮袋に入るるなり』

葡萄酒も袋もどつちもダメになつてしまふ。新しい葡萄酒は新しい皮袋に入れなくてはいけない。新しき福音は、新しき在り方をもつて、これを本当に成就していかなくてはいかんという。そこで、キリストは安息日も破つてしまふ。その後に出てきます。

●せざるを得ない

皆さんは、こうやつて安息日に、日曜日にやつて來る。これはただボヤツとするために來たのではない。神の力を、キリストの力を、御言御靈を本当に化体させるために、体と化するためにやつて來るんでしょ。安息日はむしろ、神のうちに安らうことによつて、力を得んがために。聖書のうちに自分を没入させることによつて、力を得んがために。

ところが、旧約の世界は、

「すべし、すべからず」

の世界で一生懸命やつてゐるわけだ。そんなことではくたびれてしまふよ。道徳では意志の選択を、選びをやる。これかあれかと。すべし、すべからずと。もう一つ越えてしまふと、学生ならば、



「私は生徒だから勉強せざる得ません。勉強することが楽しいんです」と、これが本当の世界です。

「勉強しないと、試験に落第するから。先生に叱られるから。入学試験に及第できないから」

なんていうのは本当の勉強ではない。ところが、そういう勉強がほとんど、1000のうち999はそういう勉強の仕方をしている。

「私は試験で落ちてもいい。とにかく勉強せざるを得ないんだ」

という、そういう生徒がどこにいるかね。ざるを得ないで勉強する。

「ざるを得ない」

という歩きかたをやつていきましょう。これが福音の世界です。愛せざるを得ない。助けざるを得ない。勉強せざるを得ない。今日はもう休まざるを得ない、なんてね。とにかく、靈的法則の世界に乗つかつてくれれば、「ざるを得ない」という世界が本当の自由なんです。

「何々せざるを得ない」

という、これが本当の自由です。「ざるを得ない」というのは必然でしょうが。必然即自由ということになつたならば、これは本ものになる。偶然じやないですよ。

### ●平伏しと赦し

さつきから罪の話が出てきたが、病は、人間の肉体的な病は死をもたらす、肉体の死を。罪がもし贖われないと、これは「第二の死」にやつてくる。「罪と罰」というね——ドストエフスキイではないが——罪の法則は罰です。罰をしないで赦される。

ところが、これは話がちょっとずれてしまふけれども、日本の刑法というのは少し軽すぎるね。人を幾人も殺しておいて、死罪にならないなんて、どういうんだろうね、あれは。

「それでは、俺は何してもいい」

なんていうことになつてしまふ。

「目には目を。歯には歯を。生命には生命を」

という。これは旧約の世界だけれども、しかし、そういうたった厳然たるもののが大事なんです、ある意味において。だから、キリストは生命をもつて、自分の死をもつて罪を贖つた。

「まあ、よしよし」

なんて言つて赦したのではない。キリストは、我々犯罪者が死刑の宣告を受けた、

「その死刑を私が受けとつてやる」

と言つて、死んだようなのがキリストなんだ。我々の身代わりになつて、キリストは罪を背負つたのが、これが「贖罪」ということです。けれども、それで終わらない。必ずキリストは、彼は罪びとではないんだから、「永遠の生命」として甦つてきた。

「この生命をお前たちにやるぞ」



と言ふんです。

もう少し、罪と罰が厳然としていなくてはダメです。しかし、それに対し

「本当に私は悪かった」

と悔改める。そこには赦しがくる。悪かつたという悔改がないところに赦しは来ないですよ、  
「赦し」なんて言つたつて。

「汝の罪ゆるされたり」

と、本当にそう言われたら、

「本当に私は申し訳ありません！」

と平伏す。

「ああ、そうですか、ゆるされましたか」

なんて言つたらダメだよ、そんなのはまた地獄に往つてしまふ。そういう心の世界の、何と言いますかね、人の目にはわからないことでも、神さまは知り給う。

悔改めてもまた人間はやりそこないをやる。だから、キリストが

「七度を七十倍にして赦せ」

と言われた。「七度を七十倍にして赦せ」ということは、

「人間はどうにもならんよ」

ということだ、或る意味においては。

「その赦しは結局、私の十字架のほかにないんだ」

ということなんです。まあ、人間なんていうものはしようがないもんですよ。戦争なんていうものは悪いに決まつているんだけれども、もの凄い武器を作つてしまつて、核兵器が爆発したら、世界はもうお終いではないですか。分かりきつているんだ。分かりきつているけれども、武器で偽りのバランスをとつてゐる。

もう人間というものがいかに救い難き存在であるかということがはつきりしてゐる。絶対に宗教の世界を要する。それをみんないきな顔をしてゐるよな。皆さんはこのことを本当に身にしみて感じてゐる方だから。その反対に、本当にキリストの救いの力を、生命をいただいて動かなかつたら、つまらんですよ。

それで我々は、キリストという

「新しき葡萄酒」

であるところの——葡萄の汁は一番血になりやすい。だから、血にたとえられる。血は生命のあるところです——生命の福音は、生命ある聖靈の力によつて——その「新しき皮袋」というのはいわゆる律法でないところの靈法の中に入つて——そして、生きようというわけです。では、今日はここまで。

